

問題解答 7

文責：松田一徳

平成 22 年 7 月 16 日

問 43 (i) $a \in \mathbb{C} \setminus \mathbb{R}$ に対し, $R_a = \inf\{|a - t| \mid t \in \mathbb{R}\}$ とおくと, $F(z)$ は $|z - a| < R_a$ で

$$F(z) = \sum_{n=0}^{\infty} c_n(z - a)^n$$

るべき級数展開されることを示せばよい。

$0 < \rho < R_a$ を任意に取り固定する。 $|z - a| \leq \rho$ で考えると, 任意の $t \in \mathbb{R}$ に対し $\frac{|z-a|}{|t-a|} \leq \frac{\rho}{R_a} < 1$ だから

$$\begin{aligned} \frac{1}{t-z} &= \frac{1}{(t-a)-(z-a)} = \frac{1}{t-a} \frac{1}{1-\frac{z-a}{t-a}} \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(z-a)^n}{(t-a)^{n+1}} \end{aligned}$$

となる。従って

$$\frac{f(t)}{t-z} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(z-a)^n f(t)}{(t-a)^{n+1}}$$

となる。これは $t \in \mathbb{R}$ に対し一様収束する。実際, \mathbb{R} 上で $|f(t)| \leq M$ と押さえられるとすると,

$$\begin{aligned} \left| \frac{f(t)}{t-z} - \sum_{n=0}^k \frac{(z-a)^n f(t)}{(t-a)^{n+1}} \right| &= \left| \sum_{n=k+1}^{\infty} \frac{(z-a)^n f(t)}{(t-a)^{n+1}} \right| \\ &\leq \sum_{n=0}^{\infty} \frac{|z-a|^n f(t)}{|t-a|^{n+1}} \\ &\leq \sum_{n=k+1}^{\infty} \frac{\rho^n}{R_a^{n+1}} \\ &\leq \left(\frac{\rho}{R_a} \right)^{k+1} \frac{M}{R_a - \rho} \\ &\rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty) \end{aligned}$$

となることからわかる。これにより, 積分と極限が交換可能であるから

$$\begin{aligned} F(z) &= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{f(t)}{t-z} dt = \int_{-\infty}^{\infty} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(z-a)^n f(t)}{(t-a)^{n+1}} dt \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{(z-a)^n f(t)}{(t-a)^{n+1}} dt \end{aligned}$$

となる。よって

$$c_n = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{f(t)}{(t-a)^{n+1}} dt$$

とおけば、 $|z-a| \leq \rho$ の範囲で

$$F(z) = \sum_{n=0}^{\infty} c_n (z-a)^n$$

が得られる。ここで ρ は $0 < \rho < R_a$ を満たす任意の数だったから、この展開は $|z-a| < R_a$ の各点で成立する。これで主張が示せた。

(ii) 十分小さい $r > 0$ をとる。線分 $-R \leq t \leq x-r$, 半円 $x+re^{i\theta} (-\pi \leq \theta \leq 0)$, 線分 $x+r \leq t \leq R$ を合わせた経路を C_x^- とする。 $R \rightarrow \infty$ を考えると、

$$\lim_{y \rightarrow 0} F(x+iy) = \int_{C_x^-} \frac{f(t)}{t-z} dt$$

となる。また、 $-R \leq t \leq x-r$, 半円 $x+re^{i\theta} (\pi \geq \theta \geq 0)$, 線分 $x+r \leq t \leq R$ を合わせた経路を C_x^+ とすると、同じようにして

$$\lim_{y \rightarrow 0} F(x-iy) = \int_{C_x^+} \frac{f(t)}{t-z} dt$$

が得られる。さらに、経路 $-C_x^+ + C_x^-$ は正の向きの円周 $|t-x|=r$ だから、

$$\begin{aligned} \lim_{y \rightarrow 0} (F(x+iy) - F(x-iy)) &= \int_{|t-x|=r} \frac{f(t)}{t-x} dt \\ &= \int_{|t-x|=r} \frac{f(t)-f(x)}{t-x} dt + \int_{|t-x|=r} \frac{f(x)}{t-x} dt \\ &= 2\pi i f(x) \end{aligned}$$

となる。

(iii) 略

問 44 有理関数が $\bar{\mathbb{C}}$ 上の有理型関数になることは明らか。

逆を示す。 f を $\bar{\mathbb{C}}$ 全体で定義された有理型関数とする。このとき f の極は高々有限個である。 ∞ 以外の極を b_1, \dots, b_n とし、 $b_{n+1} = \infty$ とおく。さらに、各 b_k のまわりで Laurent 展開したときの主要部を

$$P_k(z) = \sum_{l=1}^{m_k} \frac{c_{-l}^{(k)}}{(z-b_k)^l} \quad (k=1, \dots, n),$$

$$P_{n+1}(z) = c_1^{(n+1)} z + c_2^{(n+1)} z^2 + \dots + c_{m_{n+1}}^{(n+1)} z^{m_{n+1}}$$

とする。

$$g(z) = f(z) - (P_1(z) + P_2(z) + \dots + P_{n+1}(z))$$

とおけば、 g は b_k ($1 \leq k \leq n+1$) 以外で正則である。また、各 $k=1, \dots, n$ に対し

$$g = (f - P_k) - (P_1 + \dots + P_{k-1} + P_{k+1} + \dots + P_{n+1})$$

と書きなおすことにより， b_k は g の除去可能な特異点であることがわかる．従って g は \mathbb{C} 上の正則関数と考えてよい．

一方， f の ∞ のまわりでの Laurent 展開の定数項を c とすると

$$\lim_{z \rightarrow \infty} (f(z) - P_{n+1}(z)) = c$$

となる．また， $k = 1, \dots, n$ に対し

$$\lim_{z \rightarrow \infty} P_k(z) = 0$$

である．従って

$$\lim_{z \rightarrow \infty} g(z) = \lim_{z \rightarrow \infty} (f(z) - P_{n+1}(z)) - \lim_{z \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n P_k(z) = c$$

となる．

以上により， g は有界な整関数であるから，Liouville の定理により g は定数である．従って，結局

$$f(z) = \sum_{k=1}^n P_k(z) + P_{n+1}(z) + c$$

と書ける．この右辺は明らかに有理関数である．

問 45 一次分数変換

$$\varphi(z) = \frac{az + b}{cz + d} \quad (ad - bc \neq 0)$$

は，行列

$$A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \quad (\det A \neq 0)$$

で与えられる．これを $\varphi_A(z)$ と書くことにする．

関数の合成は行列の積に対応していること，単位行列 E が恒等写像を定めること，そして逆行列には逆関数が対応していることから，リーマン球面をリーマン球面にうつす正則全単射は一次分数変換に限ることがわかる．

問 46 略